

「ナヌムの家」を訪れる

多文化社会学部 近江 美保

森川・近江基礎演習B（2年生対象）による合同の「韓国平和ゼミ」の一部として、2107年3月15日、「ナヌムの家」を訪れた。「ナヌムの家」とは、元日本軍「慰安婦」のハルモニ（おばあさん）たちが暮らす場所であり、敷地内には、日本軍「慰安婦」歴史館と国際平和人権センターが併設されている。私たちが訪問した当時は10名のハルモニたちの生活の場だったが、7月に金君子ハルモニが亡くなり、ここに暮らすハルモニは、現在、9名となっている（2017年末、「ナヌムの家」ホームページ（http://www.nanum.org/jap/bbs/people_list.php?pp_1=1）より）。「慰安婦」問題は、いうまでもなく、現在も日韓関係に大きな影を落とす問題であるが、私自身、この問題を研究テーマとして直接的に取り上げたことはなく、今もって、この問題に対する十分な知識と理解を有しているという自信はない。この複雑かつ困難な問題を扱うためには、事前準備も十分とはいえない状況での韓国訪問であったが、それでも、「ナヌムの家」を訪れたことは、学生たちにとっても私自身にとっても、忘れがたい経験となった。

韓国に出かける前の勉強会（3月2日）では、参加する学生たちが「慰安婦」問題のいくつかの側面を理解するための文献について報告した（以下のカッコ内の文献は、勉強会で使用したもの）。この問題は、日本軍という軍隊による組織的な性暴力であり（高良沙哉「第2章 いわゆる「慰安婦」に対する軍隊の性暴力」『慰安婦問題と戦時性暴力』明石書店、2015年）、日本による植民地差別のひとつの表れであるのだが、性にまつわる問題であるがゆえに、公的な問題ではないとして、国の関与が否定されてきた。一方の韓国では、韓国社会の性的道徳観から、被害者が「汚れた女性」というレッテルを貼られることを恐れて口を閉ざし、男性たちも、自分たちの所有物である女たちを日本人に横取りされたことを不名誉として、やはり語らずにいたという（山下英愛「補論 勤労挺身隊となった人々の人生被害について」『ナショナリズムの狭間から』明石書店、2008年）。この沈黙を破ったのが、1991年に元「慰安婦」として名乗り出た金学順さんである。その後の「慰安婦」問題には、様々な立場から様々な人々が関わり、

国家による謝罪や補償をめぐる議論や「アジア女性基金」による償いへの批判などが絶えることなく続き（大沼保昭「終章 21世紀の日本のあり方」『慰安婦問題とは何だったのか』中央公論新社、2007年）、昨今の「日韓合意」や「少女像」をめぐる対立につながっている。補償問題の背後には、日本によるアジアの国々への戦後補償に大きく介入した米国の存在もあり、第2次世界大戦後、70年以上経った今も日本と隣国との火種となっている（内海愛子「今も続く補償問題」、「日本政府のいう「解決済み」、戦後補償裁判をめぐる新たな動き」『戦後補償から考える日本とアジア』山川出版社、2015年）。

「ナヌムの家」を訪問した日、私たちは、「ナヌムの家」スタッフからの説明を受け、映像資料を見たあと歴史館を見学した。歴史館の展示では、ハルモニたちが過ごさなくてはならなかった「慰安所」の部屋の小ささ、また後掲の前門さんの感想文にもあるように「慰安婦」を医師の診断により「適・不適」に分類した書類の事務的な冷静さが衝撃的であった。その後、「ナヌムの家」でハルモニたちとお話させていただいたのだが、ハルモニたちを前にして、私自身、何と言ったらよいのか言葉が見つからず、ただハルモニたちの手を握ることしかできなかった。今改めてハルモニたちに伝えたかった言葉は何かと考えるとそれは「ありがとう」である。日本という自分の国によって過酷な経験を強いられた人々に向かって「ありがとう」というのはおかしいかも知れない。しかし、つらい体験と困難な人生を生き延びて、私たちの目の前にいてくれたことに「ありがとう」と言いたいと思う。この日の最後に韓国の学生も一緒に席で、「どうしてよいかわからず、ハルモニたちに近づくこともできなかった」と話してくれた男子学生の気持ちも正直かつ貴重なものである。

学生の感想文では、いずれも「ハルモニたちは「お金」ではなく、謝罪の「言葉」を求めているだけなのに、そこに国家が絡んでくるだけでそんなに難しいものになるのだろうか」、「国家が歴史的事実を認めることは、それほど難しいことなのか」という疑問が投げかけられている。おそらく、ハルモニたちも同じような疑問を持ちつつ、長い時間を過ごしてきたのだろう。問題を解決するためには、こうした素直な疑問に立ち返り、考え、話し合うことが必要なのではないか。「ナヌムの家」を訪れた後に交流した韓信大の学生たちとは、そこまで深い話ではできなかったようだが、お互い嫌いあっているわけではないと実感できたことは、双方の学生にとっての初めの一歩である。「ナヌムの家」を訪れた後であったら（第1日目に訪れた）ソウルの日本大使館前の「少女像」の脇でテントを張っていた学生たちとも、学生同士、もっと話ができただのかもしれない。

私が専門とする国際人権法は、国家間の約束事としての国際法に個人の尊厳と

いう概念を持ち込んだ。「尊厳」とは、人間を人間として扱うことであり、「慰安婦」問題は、そもそも「慰安婦」にさせられた女性たちを自分と対等な人間と考えていたら起きなかった問題である。しかし、それが実行されてしまった背景には、植民地の女性への差別とともに、戦争遂行という「大きな目的」があった。私のもう一つの専門であるフェミニズムの分野では、理性と感情を切り離し、理性のみに価値を認めてきた既存の学術研究や政策のあり方を批判する。つらい、悲しい、怖いといった気持ちや怒り、あるいは、うれしい、楽しいという気持ちは、どれも人間として当然のものである。それらを抑え込み、人間の尊厳を踏みにじってでも遂行すべきという「理性」的な判断に基づいて行われるものが戦争である。今回訪れた板門店でも、兵士たちは感情を表さないように訓練されているとの説明があった。そうやって彼らが、守っているものはいったい何なのか。非現実的と言われようとも改めて考えてみるべきではないだろうか。

今回の韓国ゼミに長崎から同行してくださった鄭美香さん、ソウルから「ナムムの家」に駆けつけてくれたチョウ・ミスさん、おふたりの通訳とハルモニたちへのやさしく親しい様子が、学生たちの心を和らげてくれたことは間違いない。韓信大学の李起豪先生の熱のこもった解説付きのソウルの街歩き、同じく韓信大学の河棕文先生の学生交流へのご協力にも、感謝を記したい。そして、韓国ゼミの合同開催を提案してくれた森川先生にもこの場を借りてお礼申し上げる。

【学生感想文】

「韓国ゼミ」に参加した意義

岸川 友菜

私にとって今回の「韓国ゼミ」は人生で3度目の韓国訪問であった。しかし、それまでの訪問の目的は買い物を楽しんだり、美味しいごはん屋さんを巡ったりといったものであったため、今回の訪問で、自分がいかに韓国という国のある一部分にしか目を向けていなかったのかというのを思い知らされた。

韓国ゼミの目的としては、発展しつつある北朝鮮に対して国際社会がどのようにかわっていくべきなのかを考えること、それから、いわゆる「従軍慰安婦」の問題が日韓関係にどう影響するのかを考えることであったと私は理解している。

その目的を無事に果たすために、私たちは事前学習と称して、それぞれが主要国の代表になりきって連携をはかろうと画策するシミュレーションを行ったり、いわゆる「従軍慰安婦」に関する資料を読み解いたりして知識を蓄えていった。

シミュレーションでは、それぞれの国益に対する確固たる意志がある中で、同盟を結ぶなどといったような連携をはかっていくことの難しさを痛感し、「この国とあの国が協力したら、平和は守られるのでは」というような客観的に正しいような意見と、実際にそれが実現するというものの間には、予想以上に大きなギャップがあることを学んだ。

また、いわゆる「従軍慰安婦」に関しては、解放されてもなお、その経験がどれほど辛く悲しい人生を歩ませたのかということを知った。日本のメディアで取りざたされるほとんどのものとは異なり、韓国でどうとらえられてきたのかという別の切り口から学ぶことが出来たように思う。

このように事前にはっきりとした準備をしてから臨んだ韓国ゼミであったが、まさに実際の現場で見て、聞いて、感じるということというのは事前学習で学んだものとは比べ物にならないほどに強く胸に迫るものがあった。

北朝鮮と韓国の軍事境界線をまたいで北朝鮮側に足を踏み入れた時、日本で県境をまたぐのと同じように、その境界線近くは空気も景色も全く変化していないはずなのに、言葉では表しにくいのだが、「私は北朝鮮にいる！」と強く感じさせられた。それはもしかすると、警備していた韓国軍の兵隊たちが醸し出す独特の雰囲気によるものかもしれないが、文字通り「北朝鮮は間違いなく異国である」というのを肌で感じた。

その境界線へ向かうバスの中で、ガイドさんが「北朝鮮では自転車が最近ブームになっていて乗用車と同じくらいの価格で売られている」と話していた。それは閉鎖的な北朝鮮がどれほど世界に後れを取っているのかを明確に表した話であるのと同時に、北朝鮮側が許可した場合にだけテレビ等で紹介される、大都会平壤の映像とはかけ離れた話であり、北朝鮮のメディアによる意識操作や貧困格差の拡大といったものを、とてもリアルに感じる事が出来た。

北朝鮮に対して国際社会がどのようにかかわっていくべきなのかというのは、まだわからないが、その異質さを感じ取った経験からそのまま放置することはできないのではないかという考えが強くなったように思う。これからの学びにいかしていきたい。

そして、今回の韓国ゼミで間違いなく1番印象に残っているのは、いわゆる「従軍慰安婦」であったおばあさん（ハルモニ）たちが暮らす「ナムムの家」を訪問したことである。あの時は自分でもよく分からない感情に支配されて、滞在の間中ずっと涙がこぼれ落ちそうになっていた。ハルモニたちが歩んだ悲しい人生に対しての涙なのか、同じ日本人として過去にそんな悲惨な行為を行ったことに対する憤りや悔しさからくる涙なのか、自分でもよく分からなかった。実際にハル

モニたちに会ったり、併設されている資料館で、いわゆる「従軍慰安婦」に関する資料を見たりする中で、自分の中で整理できないほどに強く感じ取るものがあったのだと思う。

私はそれまで、世界の色々な所につくられているという「少女像」に関するニュースを目にするたびに、韓国人の友達もいて、全員がそうではないという事は理解しているつもりなのだが、どうしても「反日」というイメージが頭をよぎってしまっていた。しかし、「ナムムの家」で働く韓国人の女性が「どうかこの問題に関する事で、私達が反日であると思わないでください。日本のことは好きですが、ただハルモニたちの受けた傷は相当なものだから、謝罪をしてほしいだけなんです。」と、流ちょうな日本語で話してくださったのを聞いて、安易に反日に結びつけようとする風潮や、自分も含めて、世間の認識を変えていく必要性があると強く感じた。

ハルモニたちのほとんどは90歳をこえた非常に高齢な方たちである。それでもなお、流ちょうな日本語で「来てくれてありがとう。またおいでね。」と声をかけてくれたことが最も印象的であった。日本語をいまだに覚えていてくれたこと、つらい経験を思い出す言語であるはずなのにそれを話してくれたこと、嬉しいのにすごく複雑な感情になったのを鮮明に覚えている。

だれかを傷つけてしまったのなら謝るというのは小さいころから教えられる当たり前のことではないのだろうか。ハルモニたちは「お金」ではなく、謝罪の「言葉」を求めているだけなのに、そこに国家が絡んでくるだけでそんなに難しいものになるのだろうか。自分にできることはあるのだろうか。文献調査だけでは感じるこのできない、貴重な経験をさせていただいた訪問であった。

楽しみにしていたハンシン大学の学生との交流は、1年生が多かったこともあり、予想していたよりも、深く議論を進めるにはあまりにも時間が短すぎたように思う。いわゆる「従軍慰安婦」に関する問題が日韓関係に悪影響を及ぼすと思うか、というテーマから初めたのだが、1年生には難しい内容で、説明が必要になったからだ。しかし積極的に自分の考えを話してくれたことは嬉しかった。当事国の国民同士で議論をするというのは滅多にないことで、有意義な時間を過ごせたと思う。

意見の中で多かったのは、国民やハルモニたちの気持ちを汲み取らずに、上の権力者だけで話が進められているのが問題であるというものだった。そして日本語学科の学生であり、日本に好感を抱いているからだというのを考慮しても、ほぼ全員がいわゆる「従軍慰安婦」に関する問題で悪影響を及ぼすことはないのではないかと話してくれた。そこには認識の違いをできるだけ改善していく必要性

があるし、中には正直にわからないと答えてくれた学生もいて、今のままでは悪影響もあるかもしれないが、日韓の国民だけでなく国家としても歩みよることができたなら、将来は前向きな意味でわからないといえるのではないのだろうかと思った。

また、興味深いと感じたのはほかのグループの発表であった、韓国兵もベトナム戦争時に同じようなことをしたが無罪にしていないというものだ。戦争時には非常に悲しいことだが、女性や子供が傷つけられる残忍な事件が頻発する。国家は加害者にも被害者にも容易になることが出来る。韓国はまさにその両方の立場にあるという事だ。これから先、両方の問題とどう向き合っていくのか、注目していきたいと思う。

朴元大統領の弾劾で大統領の不在という非常に珍しい時期に韓国を訪れることになった今回のゼミだが、その有意義な学びの時間はここでは書き表せられないほどであった。いまは自分のスペースを離れなくてもインターネットなどを通して様々な情報を得られる便利な時代であるが、やはりそれらを通して学ぶことと、実際にその場に行き、自分で触れて学ぶことには雲泥の差があるのだと、本当の意味で初めて知るきっかけになった。それが外国ともなるとなかなか現地まで足を運ぶというのは難しくなってくるが、これからも学んでいく中で、それを1つの教訓としてずっと心にとめておきたい。

韓国ゼミでの学びと感じたこと

前門 麻美

韓国の歴史や日本との関係性など、事前の調査不足を感じながら、今回ナムの家や朝鮮戦争のメモリアルなどを訪れたが、ガイドをしてくださった先生方や現地の学生もとても親切に私たちを受け入れてくれたことが印象に残っている。私と同年代の韓国の大学生に、韓国のことや日本と過去に何があって今何が問題とされているのか、私はよく理解していないということを正直に伝えると、「そうなんだ」と頷きながら、一緒に解決する方法を探していく必要があります、と教えてくれた。そこで私は、韓国の人々が皆日本人を実は嫌っているのではないかという偏見を持っていたことに気が付き、恥ずかしくなった。友人のように接してくれる彼らの態度を見て、「人種」は存在しないということを改めて痛感すると同時に、これから国家が何をすべきであるのか、私たちには何ができるのかということを考える機会となった。

ハルモニのおばあさんたちが暮らしているナムムの家では、想像を超えるほどの衝撃を受けた。今までに見たことのないような「慰安婦」に関する資料が並べられており、信じがたい内容のものが多くあった。ナムムの家を訪れる前の私は、そもそもなぜ外国の女性たちが「慰安婦」になっていたのか、という疑問を持っており、その問いに対して、労働の一種として、賃金のために「慰安婦」になることを承諾し来日していたのかもしれない、と心の中で思っていた。しかし、現実とは全く異なるもので、また私は恥ずかしいと感じた。まだ幼い頃に、家の近所で日本の兵士に誘拐されそのまま日本で「慰安婦」とならざるを得なかったことや、賃金と呼べるほどのお金も彼女たちは受け取っていなかったこと、さらに過酷な「労働」から逃げ出そうとする者が殺されていたことなどの事実を突きつけられた。彼女たちには値段が付けられ、性病の有無を「可・不可」とされ物であるかのように扱われ、時間の割り振りも完全に軍の支配下の中にあり、彼女たちに人権らしいものはなかったといえる。このような証言がはっきりとなされていたにも関わらず、何も知らなかった自分が本当に情けないと思った。日本のメディアや教科書でこの事実が多く語られないのはなぜなのか、国家が歴史的事実を認めることは、それほど難しいことなのかと考えた。賠償金は1円でもいいから責任を認めてほしい、というハルモニたちの声がなぜ両政府に届かないのだろうか。日本国内ではメディアを通して、いわゆる「少女像」の周りで集会を行う人々が、「反日」であるかのように報道する印象がある。今回、全く異なる視点から「従軍慰安婦」の問題について考えさせられたことで、ある一つの見方だけで物事を判断してはいけない、と強く感じた。批判的な思考を常に持ちながら、自分で見て聞いたことを大切にしていきたい。また、このように「事実」と向き合うきっかけを得たことから、国家やメディアのせいにして知らぬふりをすることはもう許されなかったと思った。

D.M.Z（非武装地帯）の見学は、韓国と北朝鮮の緊張した状況が今もお続くことを実際に感じる機会であった。1945年に第二次世界大戦が終結した後、大国のソ連とアメリカによって分断された朝鮮半島の二つの地域が、以後それぞれに政府ができ国民的な感情を持ち始めることによって、互いに敵対する立場へと変わっていったことが朝鮮戦争のきっかけであるが、もともと同じ仲間であったはずの人々が攻撃し合うということは悲劇的だと思った。ソ連とアメリカの対立が、それぞれが支配下に置いた地域にまで影響を及ぼしたことで、休戦とはいえ現在もその跡が残っている。北朝鮮が何をしようとしているのか、誰が止められるのかわからないという今の状況の中、それほどまでに大きく環境を変えた大国の影響力に恐ろしさを感じた。また、資料館の中で、多くの死傷者が出た戦争に対し

て、韓国の国民は「兵士さん、私たちのために戦ってくれてありがとう。」というような感情をもっていることが伝わってきたが、それもやはり国民感情のあらわれであると思った。しかし全く違う国家として互いを見ている一方で、非武装地域の外側の嚴重な武装状況を見ると、「休戦状態」であり、同じ朝鮮半島に位置しながら争いが続いているということを実感させられた。このように、他国がある国家や地域へ介入し、分断したり支配しすぎたりすることで、元には戻すことができなくなるということを痛感した。朝鮮半島以外にも、このような過去の国家支配によって現在にもその影響が残るケースは少なくないだろう。しかし元に戻すことが難しい一方で、朝鮮半島のこの長い戦争がいつか終わるかもしれないという希望を捨てたくはないと思った。誰もが予想していなかったベルリンの壁の崩壊のように、いつか朝鮮の人々の「国民感情」が同じものとなることを祈りたい。

慰安婦問題と韓国の軍事問題

竹田 礼華

【慰安婦関連】

ソウルにおける日本大使館前の少女像設置の継続を求める運動に参加しているのは慰安婦被害者とその家族が中心であると思っていた。しかし、想像していたよりも多くの学生が参加していたことに驚いた。大学生が少女像の近くで泊まり込みをして少女像を守っていた姿も印象的だった。現地の大学生と慰安婦問題について話した際に慰安婦問題について韓国でも歴史の授業でほとんど習わないということが意外だった。同時にそれではなぜ大学生が少女像の設置継続を含めた慰安婦に関する運動に関わるようになったのかと疑問に思った。韓国の学生に尋ねてみると慰安婦問題を忘れないように、また解決に向けた進展を願う黄色いリボン運動の存在が明らかになった。この慰安婦問題に興味を持つきっかけとしてこの黄色いリボン運動がある。慰安婦問題の解決を求める運動に賛同・支援したいと感じた人は黄色いリボンのストラップや黄色いリボンがのった商品を購入・身につけることで支援の輪を広げることができるらしい。ナムムの家で慰安婦となり、性的暴行の被害をうけたハルモニたちの証言ビデオや資料館見学を通して慰安婦の実態は想像をはるかに越えたすさまじいものであり、衝撃を受けた。被害を受けた慰安婦の中には自分が慰安婦であったことを公表するのが恥ずかしく、公表できない人も大勢いると聞いた。その気持ちは十分に理解でき、尊重される

べきであると考えているが、慰安婦であった過去を公表することがこのような過ちを二度と繰り返さないような世の中にしていくための原動力のうちの一つとして作用しうるのではないか。原動力として作用させていくように日韓双方の努力を重ねていかなければならない。

慰安婦問題を解決するためには具体的にどのようなことが必要であるのかということに関しても現地の学生と話していく中で深く考えさせられた。慰安婦であったハルモニたちが求めているのは日本側、安倍総理大臣からの謝罪である。現地の学生、慰安婦のハルモニたちは韓国側が世論を聞き入れず、10億円を受け取ることで日本側と勝手に合意を済ませてしまったことに対しても憤りを感じていた。ナムムの家の運営は仏教団体からの多くの支援上に成り立っていた。高齢で身寄りのないハルモニたちも多いという状況の中でそれを支援する、社会的に弱い立場を助けることは仏教の考え方に通じるものであると言える。これは仏教団体の社会的貢献の一環であると捉えることもできる。私が春休みに渡航した台湾でも生活に困窮している人々の拠り所として道教団体の存在があった。アジアでは仏教を信仰している国が多く、社会貢献は単に企業が意図して行うものではなく、宗教団体がその宗教精神に基づいて行う場合も含まれる。また、私の研究テーマである社会貢献のあり方も多様性を持つものであると言える。金銭的な援助だけではない、もっと奥深いものであると感じた。今回のゼミを通じて企業の社会貢献は今では当たり前のように考えられているが、その考えの起源についても調べる必要があると感じた。

【板門店見学】

板門店ツアーでは板門店に行くまでの途中で北朝鮮側からの攻撃に迎戦できるように軍備がなされていた。この様子を聞いて北朝鮮と韓国はあくまでも「休戦中」であり、いつ戦争が再開してもおかしくない状況であり、緊迫した雰囲気を感じた。日本人は北朝鮮から発射されたミサイルが日本海沖に落下してもどこか他人事のように感じていて危機感を覚えていない人が多く、とても平和ボケしていると感じた。その理由の一つとして韓国と北朝鮮のように陸続きでいつでも攻め入られる危険性を有しているという状況に置かれていないからであるだろう。今回北朝鮮側が地雷を埋めている可能性があるとのことから帰らざる橋の見学は出来なかった。韓国も北朝鮮もお互いの攻撃を封じるために何らかの対策を取っていることが分かった。その状況を知った時日本の危機管理はどの程度なされているのか疑問に思った。日本にはいくつものアメリカの基地があり、アメリカの傘のもとで安全を保障してもらっている状況である。これから10、100年後の未来においても同じようにアメリカの防衛のもとで平和な日本を実現していくのか、

もう一度よく考えていかなければならないが来ていると思う。国家として独立することのうちの一つに自分の国の安全は自分で守ることも含まれてはいないだろうか。

今回の韓国ゼミでは知識として持ち合わせていることを実際に目にしたこともあり、新たな事実を知ったこともあり、良い意味で刺激を受けた。今回のゼミで見聞きしたことを卒業研究の参考として織り交ぜて発展させていきたい。

表 朝鮮半島核問題シミュレーション結果 2017年12月3日 (付属資料)

時刻	発信国	受信国	内 容
テスト	日本	米国・韓国	北朝鮮のミサイル発射実験に対し、日本国政府は独自の経済政策を検討する。米国、韓国の両国も歩調を合わせることをのぞみます
14:03	アメリカ	5カ国+国連	〈実験予告〉に対し、国連に抗議の発出を要請する。
14:10	韓国	国連	北朝鮮が実験予告の表明をしております。今後の対応について教示願う
14:11	中国	北朝鮮	もしアメリカと対立することになったとしても、支援はできない。 (米国との対立回避)
14:13	国連	6カ国	国連より北朝鮮の核実験の中止の要請及びより強い制裁について警告を発出！ 実験を行う場合には、現在の制裁に加え、「他国に開かれている銀行口座をすべて遮断し、北朝鮮国籍の船舶を停止します」 また、「行った場合には、安全保障理事会を緊急的に行う予定です」。
14:14	日本	中国	北朝鮮の核開発、弾道ミサイル発射の脅威は今までと異なるレベルに達しています。この新たな段階の脅威、明らかな国際社会に対しての明確な挑発に対して、一致団結し断固たる制裁をとる必要があります。 とくに貴国の北朝鮮に対する抑止力としての役割は非常に重大なものであり、我が国と協調して様々なレベルの制裁を加えるべきでしょう。北朝鮮の核開発にたいしては目に余るものがあるということは貴国も感じていることでしょう。国際社会の中で完全に孤立の方向に進んでいる中、経済制裁という形で鉱物資源やエネルギー、工業製品に対する輸出入の厳しい制限を実現していかなければならないと考えます。 (制裁で強硬姿勢)
14:19	中国	日本	〈日本から経済制裁の要請に対する返答〉 これ以上の経済制裁は北朝鮮の貧困層に対して著しく打撃をあたえてしまう。明らかな挑発行為だとは思いますが、今の北朝鮮に実行するだけの力はないだろう。まだ経済制裁に至るレベルではないと考える。 (制裁に消極的)
14:22	北朝鮮	中国	〈同盟要請〉北朝鮮が今後立ち行かなくなり、韓国のもとに統一されれば、アメリカ軍は現在のわが国に進駐し、中国の脅威となる可能性がある。中国が今後共産党のもとに国家を維持するつもりなら我々に物資支援することを再度要請する。(中国に居直り型で物資支援を要請)
14:25	アメリカ	北朝鮮に質問 5カ国	北朝鮮は何の実験を行うか、具体的に説明せよ。
14:25	北朝鮮	ロシア	同盟要請 第二次世界大戦後からこれまでの関係維持のもと、対ウクライナにおける軍備技術と引き換えに、我々に経済的支援を要請する。 要請に応じなかった場合、目標位置を北方に転換する方針も検討中である。(支援要請)
14:28	中国	北朝鮮	もちろん同じ共産主義国として支援はおこなうが、今回のような国際協調に反するような挑発行為は慎むべきだ。(説得、消極的支援)
14:32	アメリカ	日本 韓国 ロシア	北朝鮮に対しては、毅然とした態度を取ることを求める。 中国から以下の引用のような提案を受けた。 しかし北朝鮮の行動は、日本や韓国さらにはアメリカの領海を侵犯しうるものである。 まだ挑発行為にすぎないかもしれないが、国際秩序を乱す行為であることに変わりはない。 現段階で、経済制裁の強化を明確に示唆することを求める。(強硬姿勢)
14:36	国連	5カ国	状況報告を各国に要請
14:38	北朝鮮	米国	〈要請〉アメリカ合衆国が我々と対等な国交を開く姿勢を示せば実験の変更も検討する。 我々の技術ではアメリカ本土も射程距離内であることをここに警告する。
14:40	日本	国連、ロシア	北朝鮮の核開発、弾道ミサイル発射の脅威は今までと異なるレベルに達しています。この新たな段階の脅威、明らかな国際社会に対しての明確な挑発に対して、一致団結し断固たる制裁をとる必要があります。今回、北朝鮮はハワイ沖を目標に実験を行うということで、この実験における危険区域はこれまでの実験区域と大きく異なり、太平洋全体の危機に陥っている状態と言えるでしょう。この実験が行われた場合、成功、失敗に関わらず世界の多くの国々への平和や安全が危険にさらされることとなります。国連の経済制裁には我が国も先導に立って共に制裁を加えるつもりです。
14:44	国連	米国	現在の国際情勢に対し、各国も核の脅威に脅かされている現状にあります。国連側としては六者会議の開催を奨励したいと考えておりますが、米国はどのような意思をお持ちでしょうか。
14:47	アメリカ	米国	六者会議の開催を希望します。併せて、もし北朝鮮が参加を渋った場合には、相応の制裁を

			実施すると予告してください。
14:52	ロシア	米国	先の北の核実験表明に先立って、2004年に打ち出した露・韓・北の共同宣言の中で発表されたエネルギー・輸送の面での3カ国共同プロジェクト構想に新たに、中国を加え、露・中・韓・北の4カ国共同プロジェクトを推進する意図を表明する。 (共通利益:シベリア鉄道の連結・朝鮮半島横断鉄道の敷設)。 我々は「地域の全ての国の安定と安全の保障、朝鮮半島の非核化」という共通の目標を持っており、この問題は6カ国協議の過程で外交手段によってのみ解決が可能であり、協議の早期再開を支持している。 (関与・拡大策:共同プロジェクトと6者協議の支持を表明)
14:54	国連	米国	六者会議(開催について)の提案 国連からもその希望に対し積極的な支持を表明するものであります。 各国のその提案に対する意見を求めます。
14:57	アメリカ	米国	アメリカは六者会議の開催を支持します。 各国も、15:00を目処に六者会議への参加を表明するようお願いします。
15:02	韓国	米国	6者協議の参加表明の意図をつたえる
15:03	日本	米国	日本も六者会議の開催を支持します。
15:04	中国	米国	中国も六者会議への参加を表明します
15:07	韓国	米国	4カ国共同プロジェクト参加について他国の意向を問う 6カ国協議は支持する
15:34	ロシア	米国	先の北朝鮮の核開発計画およびミサイル発射実験を非難する。、「地域の全ての国の安定と安全の保障、朝鮮半島の非核化」という共通の目標を持っており、6カ国協議の早期再開を支持する。 その一方で、半島で一方向的な軍事的行動に出ることのないよう、各国に強く要請する。4カ国共同プロジェクトの推進、アジア・太平洋を含めた多国間の安全保障の枠組みの再考=6者協議で。
15:39	北朝鮮	米国	〈6カ国協議での対応について〉 六カ国協議の参加表明に異論はなく、我々も参加を予定している。 我々の今回の実験の目的は、諸外国への挑発行為ではなく自国の防衛・軍事力の強化のためであり、自国の政治的安定を目的としている。そのため、今回の会議において我々の実験に対する批判は予想しているが、その後の貴国からも自国の国防に対する代替案の提案を本会議で求める。 (中国に同調を要請)
15:39	国連	米国	六者会議に北朝鮮に参加を促すのであれば、外交関係の深い中国により強く促してみてはいかがでしょうか。 (中国に仲介役を打診)
15:42	北朝鮮	米国	北朝鮮も本会議の参加を表明する
15:44	アメリカ	米国	六者会議に関して、北朝鮮からの応答が滞っているようです。 中国からも、北朝鮮に会議参加するよう促していただけませんか?(督促の督促)
15:46	北朝鮮	米国	〈6カ国協議での対応について〉六カ国協議の参加表明に異論はなく、我々も参加を予定している。我々の今回の実験の目的は、諸外国への挑発行為ではなく自国の防衛・軍事力の強化のためであり、自国の政治的安定を目的としている。そのため、今回の会議において我々の実験に対する批判は予想しているが、その後の貴国(ロシア)から自国の国防に対する代替案の提案を本会議で求める。(中国への根拠と同じ内容:自衛と国内政治目的を強調)
15:50	UN		六者会議の参加合意について 六カ国から会議への参加表明がありました。
15:55	中国	北朝鮮	貴国はロシアが六者協議の目的としている「地域の全ての国の安定と安全の保障、朝鮮半島の非核化」についてどう考えているのか。 それについて六者協議で表明すべきだ。(政策意図の開示を督促)
16:01	ロシア	北朝鮮	回答は以下の2点である。 1 貴国の貿易・軍事力強化について これまでと変わらず引き続き、我々が必要と認める限りにおいて適宜、技術提供、貴国の安全保障計画への助言を行っていく予定である。 2 貴国の防衛の代替案について 繰り返しにはなるが、我が国としては、貴国の防衛の骨子を考えるのではなく、あくまで助言という立場から貴国の安全保障に寄与していくつもりである。(支援なき助言。消極的関与)
16:04	アメリカ	中国	六者会議について、中国の北京で開催することは可能でしょうか? (中国)は即OKの返答

16:08	北朝鮮	中国	我々の意見としては、自国の安定と安全の保障のために核を保持している。現に、ロシアもアメリカも核を保有しており、朝鮮半島のみを対象とした非核化は朝鮮半島に属する自国に対する差別であると考えている。また、貴国(中国)も核を保有しているため、貴国の非核化への対応についても六者協議で表明願いたい。⇒(中国)同意の返答
	アメリカ	5+UN	六者会議を通じて、各国が合意できる妥協点を見つければ、と思います。ご協力お願いします。 これまでの慣例に基づき、六者会議は中国の北京で開催することになりました。16:05より会議を始めます。
16:10	日本	ロシア	「北朝鮮の非核化は全世界の非核化が実現される前には不可能」と北朝鮮は明示しており、北朝鮮において核を国家の土台として交渉や国際的地位を確立しようとしているのは明らかなことでしょう。六者協議共同声明を「死滅」したと表現したのは北朝鮮自身であり、我が国自身も長らく対話や交渉を試みてきましたが、(北朝鮮は)現在の国際ルールに則った行動、核開発や弾道ミサイルの発射を停止する姿勢が対話を手段として使う限り全くもって期待できません。今回の国際ルール違反は重大かつ多くの国の平和、安全を脅かすものであり、早期解決が望まれます。また対北朝鮮協調を足掛かりに、膨大な資源を持つ貴国とはぜひ有効な関係を強化、継続したいと我が国も考えており我が国は経済協力を考えております。北方領土に関しては、今回の六者協議においての議題ではなくまた二国間の協議での議題として考えております。(対北朝鮮協調の要請と、別イシューでの対ロ接近を打診)
		6者協議 スタート	
16:15	アメリカ	6+UN	アメリカからは、差し当たり以下の提案を行います。 ・北朝鮮が行おうとしていた(実験)の内容の明確化 ・北朝鮮の武力行為の中止 ・朝鮮半島の非核化
16:21	北朝鮮		自国の安定と安全の保障のために核を保持している。現に、ロシア、アメリカ、中国も核を保有しており、「朝鮮半島のみを対象とした非核化」は我が国のみを対象にした間接的表明であると捉えられ、他国の非核化も対象とされないことに対し、そのことは誠に遺憾である。実験内容はあくまでも自国の技術発達の確認のためであり、他国への戦争を持ちかけた訳ではない。(核保有の正当化、関連国の非核化を要求)
16:26	日本		北朝鮮の実験はミサイル発射であるか。また日本の領海領空を犯すものであるか。を明確に示すことを要求します。(領海・領空侵犯について抗議)
16:30	中国		我々が此度言及しているのは包括的な核問題(核廃絶・保有)についてではなく、『先制核攻撃』に関する北朝鮮の声明と過去5回に及ぶミサイル発射についてである。これにつき我々は『先制核攻撃』に関する北朝鮮の声明を、断固として許す事は出来ない。また北朝鮮によるミサイル発射は過去5回の安保理決議に対する「深刻な違反」である。市民生活が欠乏するなかで資源を弾道ミサイルに振り向けることはとても遺憾である。これに加え、我々としては、(※米韓日の同盟を念頭において)「すべての関係当事者が互いに挑発し、緊張を高めるいかなる行為も回避し、北朝鮮の核やミサイル計画の脅威に対処することを口実に北東アジアに新たな弾道ミサイル迎撃態勢を敷くべきでない」という文言を加えるよう提案する。(挑発行動の回避を示唆)
	米国		各国に発言呼びかけ
16:30	国連		国連からの質問です。北朝鮮は無条件で核を放棄することはできますか。また、無条件での放棄が不可能である場合、核を放棄するためにどのような条件を提示しますか。
16:55	韓国		実験が単純な技術の確認であるとしましても、世界各国に脅威を与えてしまうのは自明ではないでしょうか。それにより経済制裁を受ければ、北朝鮮自体の本質的な成長が妨げられることや、更なる他国の軍拡につながるかと懸念されます。北朝鮮の真の目的である核保有による安全の確保もこれによって阻害されるでしょう。これまでの強硬路線をやめ、私たちが参加を決めた4カ国の共同プロジェクトへの参加を通じて話し合いによる安全を確保していきませんか。朝鮮戦争によって分断された私たちが、これを機に歩み寄っていきましょう。(強硬路線から関与政策に)
16:58	北朝鮮		我々の回答としては、無条件で核を放棄することはない。国連が同じ質問を、我々と同じ核保有国である中国・ロシア・アメリカに行い、3国からの回答を開示することを求める。(核保有の正当化を主張し既成事実化を目指す)

17:01	中国	国連の質問に対する回答	北朝鮮は「朝鮮半島の非核化」に対し、朝鮮半島のみを対象とした非核化であると強い差別意識をもっているようであるが、そうではなく朝鮮半島、ひいては東アジアの安定、安全のために掲げられていると考えている。世界は核軍縮の流れにあり、わが国としてもその点に関しては同調する。それゆえ、一連の北朝鮮による核実験に関しては抗議の意を表したい。また、我々としても、現核保有国との協調のもとで核削減を目指していきたいと考えており、これを国連からの質問に対する返答としたい。しかし、今回の件で北朝鮮に対してさらなる経済制裁には同意できないものである。(アジア地域安保を核保有の正当性の根拠とする、核軍縮の趨勢は容認:対米配慮?)
17:07	北朝鮮	韓国	歩み寄るために、貴国が自国にどのような経済的・物資的支援等を行うのかを表明願いたい。また、4か国共同プロジェクトに対しても4国にどのような利益をもたらし、どのように実現を図るのかについても具体的な説明を求める。(経済援助と4か国共同プロジェクト)
17:11	アメリカ		核兵器は国家のみならず人類全体の危機を招きうるものであり、非核化はアメリカの目標でもあります。事実、近年アメリカは核武装の解除に取り組んでいます。我々としては、世界的な軍縮の流れに北朝鮮も同調していただきたいと思えます。また、経済制裁により北朝鮮の市民が被害を受けることは望ましくありません。北朝鮮の非核化が進まない限り、一部工業製品の輸出や口座凍結等の制裁は維持すべきですが、北朝鮮が非武装化の流れに加わるのであれば、北朝鮮の人々への食料支援等を検討します。食料支援は、北朝鮮の内政安定化にとっても悪い相談ではないでしょう。北朝鮮には、非武装化(非核化?)の約束を求めます。(非核化に強い態度)
17:20	韓国 17:07の質問にこたえて	北朝鮮	第一に北朝鮮が世界の平和のために今後どのような動きを示すかについて明示していただきたいと思っております。その結果に応じて支援の有無、内容は決定していく次第です。今回、その内容については明言しかねます。4か国協議においては私たちだけでその方針は決めかねるところがあります。その利益としては、ロシアの先ほどの内容に示されたものが挙げられると考えております。
17:22:00	ロシア	韓国	天然ガス・パイプライン構想は、我々の天然ガスを北朝鮮経由で韓国まで運ぶものであり、貴国へのガス供給量は年間100億立方メートルで、供給期間は30年間を予定している。実現すれば、貴国の経済にもたらす影響は大きい。(※2007年のデータによれば、韓国のガス生産量は140億、消費量は1兆2300億で、日本に次いで世界2位のガス輸入国である)。北朝鮮・中国には多額のトランジット代(通過料)が支払われる。また、膨大な距離の敷設工事を行うため、膨大な労働力が必要となり、大量の雇用が生まれる。また格安の移動手段である鉄道敷設により、4か国間の人々の往来も活発となる。(経済効果を強調)
17:25	ロシア		北朝鮮の核計画は、旧ソ連の援助と支持に密接に関わっている。ソ連の継承国として、我々は北朝鮮の核問題を最も理解していると自負しており、また、北朝鮮の核問題解決にも道義上の責任を負うべきであると考えている。 1) 政治と外交手段を通じた北朝鮮核問題解決という主張 ロシアは制裁や武力措置で北朝鮮核問題を解決することに賛成しない。北朝鮮の孤立と制裁の進行、特に武力による威嚇は、北朝鮮の核兵器開発の決心を強めるだけで、地域情勢の安全保障と安定の役に立たないと考えている。そこで、一案として、先に提案した4か国プロジェクトの推進を再度提案したい。韓国からは前向きな意見をもらっている。現在水面下で、各国間の利害調整を行っている次第である。 2) 北朝鮮への安全保障提供の提案 我々は、北朝鮮が自らの核計画を堅持する理由は、安全保障が欠けていることにあるとみている。そこで北朝鮮への安全保障の提供を通じて、その核計画を軟化させ、また同時に国際社会においても核削減が世界的な潮流となることを期待する。
17:33	北朝鮮	韓国の質問を受けて	本議題における最大の焦点は、自国の非核化であると考えている。しかしながら、先ず「核保有国」としてアメリカとの対等な立場にたち、核軍縮と平和協定締結を我々は望んでいる。つまり、アメリカとの関係正常化を行うことが先決であると考えられる。アメリカとの対等関係の正常化が確保された上で、ロシアや韓国が提案する4か国プロジェクトも進めることが可能となるであろう。(核保有国としてアメリカと平和協定)